

中世文学資料解題①

星 瑞穂

はじめに

本稿は当館所蔵の資料のうち、鎌倉時代～室町時代にかけて成立した文学作品（中世文学）および後世に成立したその注釈書類の書誌解題である。広く一般の利用に供するため、作品解説を加えて掲載する。

今回は『改訂 内閣文庫国書分類目録』の「国文」の項目に挙げられている資料から、該当の資料を抽出して調査した。旧蔵者は紅葉山文庫・昌平坂学問所・和学講談所など多岐に及ぶが、近世初期に出版された注釈書も多く含み、中世文学の享受の実態をうかがうことができる。

なお、挿絵を伴う資料については、すでに『北の丸』第四五号（平成二五年）～五〇号（平成三〇年）に「当館所蔵の「絵入り本」解題①～⑥」として紹介しているので参照されたい。

【一】保元物語 江戸時代前期写 二冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇一七四」

本資料は三巻から成る軍記物語『保元物語』の写本。但し巻上が欠けている。二冊。袋綴。当館所蔵の『平治物語』（請求番号二〇三・〇一七五）とツレ。

『保元物語』は皇位継承問題から勃発した保元の乱を、源為朝を中心に描いた軍記物語である。作者・成立年代ともに未詳。成立年代の異なる多くの諸本が伝来する。敗者の視点にたつて悲劇的な語りを展開するのは他の軍記物と同様であるが、『保元物語』に特徴的なのは、為朝の超人的な剛勇ぶりで、鬼を従え伊豆七島を支配するなど伝説的な物語が記されている。

但し、本資料は諸本のうち金刀比羅本系統と考えられ、島渡に始まる為朝説話を欠く。写本としては最も多く流布したと考えられる系統である。漢字仮名まじりの本文。本資料は朱書で点が付される。

本資料は巻上を欠くため、第一冊目の内題が「保元物語中」、第二冊目の内題が「保元物語下」となっている。外題は、第一冊目は文字が一部欠けているが、第二冊目が「保元物語 下」とあるので、おそらく第一冊目も「保元物語 中」だろうと想像される。布目紙に雲母を引いた題簽に墨書されている。『平治物語』（請求番号二〇三・〇一七五）と同じ題簽である。第二冊目に押印されている蔵書印から見て、本資料は和学講談所の旧蔵と想定される。

【書誌】

外題・①「保元物〔語 中〕」（一部欠）、②「保元物語 下」左肩布目型押雲母引料紙題簽（二〇・五糎×四・〇糎）

内題・「保元物語」

表紙・香色表紙（二九・〇糎×二一・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二六・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①五八丁、②四四丁

印記・①一才「日本政府図書」「浅草文庫」、②一才「書籍館印」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明

【二】保元物語（半井本） 写年不明 三冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇一七二」

本資料は軍記物語『保元物語』の写本で、「内閣文庫蔵半井本」として知られるもの。三卷三冊。袋綴。『平治物語』（請求番号二〇三・〇一七三）、『保元平治物語附録』（請求番号二〇三・〇一七二）とツレ。

半井本は『保元物語』諸本のうち、完本としては最も古態を残す本文を持つとされるものである。『参考保元物語』は、医家であった半井通仙院（和氣瑞栄）の旧蔵だったことから「半井本」と称すると述べている。本資料はこの半井通仙院旧蔵書からの転写本であると推定されている。漢字片仮名まじり文。

外題には「保元物語 上（中・下）／半井氏家蔵」と金の題簽に墨書されている。各冊一丁目右下に「玄圃斎蔵」の朱印がある。同じ印記が鹿児島大学附属図書館の『参考保元平治物語』にある。

本資料は新日本古典文学大系『保元物語』の底本となっている。

【書誌】

外題・①③「保元物語 上（中・下）／半井氏家蔵」左肩金色料紙題

簽（一八・〇糎×三・五糎）に墨書

内題・「保元物語」

表紙・香色表紙（二七・〇糎×一九・八糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①三七丁、②四二丁、③四九丁

印記・「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」「玄圃斎蔵」「内閣文庫」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【三】保元物語 写年不明 三冊

井上頼圀旧蔵 「請求番号特〇四六・〇〇〇七」

本資料は軍記物語『保元物語』の写本。綴葉装。三冊。『平治物語』（請求番号特〇四六・〇〇〇七）とツレ。

紺に金泥で秋草文様の描かれた表紙（二四・七糎×一七・五糎）を持ち、左肩に金泥秋草文様の朱色料紙の題簽（一五・七糎×二・七糎）に墨書で外題が出されている。見返しは布目紙に金切箔と銀砂子の装飾。本文料紙

も斐楮混ぜ漉きの厚手の料紙や布目紙を用いており、体裁から見て嫁入り本に類する豪華本である。『平治物語』（請求番号特〇四六・〇〇〇七）と一緒に木製の箱（二七・五糎×二〇・〇糎×七・五糎）に入れられている。箱の蓋には中央に「保元平治」と銀泥で記されているが、現在は酸化して黒色になっている。

序文を有する点から版本系統の本文と判断され、特に古活字版系統であると考えられる。

本資料の第一丁目の蔵書印「井上氏」（二一・〇糎×二一・〇糎）から見て、井上頼圀の旧蔵と考えられる。井上頼圀の蔵書はその多くが現在無窮会専門図書館に引き継がれているが、一部が散逸している。

【書誌】

外題・①「保元物語 一」、②「保元物かたり 一二」、③「保元ものかたり 三」左肩朱色地金泥秋草文様料紙題簽（二五・七糎×二・七糎）に墨書

内題・「保元物語」

表紙・紺地金泥秋草文様表紙（二四・七糎×一七・五糎）

見返し・金切箔銀砂子布目型押料紙

料紙・斐楮混ぜ漉き紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①四四丁、②五一丁、③五二丁

印記・「日本政府図書」「井上氏」（二一・〇糎×二一・〇糎）

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。体裁や筆跡から見て、江戸時代前期の写と想

像される。

【四】保元物語 刊年不明 一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号一六七・〇〇二七」

本資料は軍記物語『保元物語』の版本。全三巻を合冊して一冊。袋綴。本文は漢字片仮名交じり。序文が独立している点、内題を「保元合戦記」とする点などから見て、寛永整版本の後印かと想像される。『平治物語』（請求番号一六七・〇〇三六）のツレ。

縹色の表紙（二七・〇糎×一八・七糎）に、四周双辺の刷題簽（一八・〇糎×三・六糎）で「保元物語 全」と外題が貼付されている。（この表紙と題簽は後補と想像される。）一方で内題は「保元合戦記」である。そして版心には「保元」とある。版心は中黒口に花口魚尾。

匡郭は四周双辺。無界。

本資料は紅葉山文庫の旧蔵。

【書誌】

外題・「保元物語」左肩四周双辺刷題簽（二八・〇糎×三・五糎）

内題・「保元合戦記」

表紙・縹色表紙（二七・〇糎×一八・七糎）

見返し・「日本政府図書」（蔵書票）貼付

料紙・楮紙

行数・每半葉一行

字面高さ・二一・七糎

匡郭・四周双辺（二一・七糎×一六・七糎）

墨付丁数・九七丁

印記・「日本政府図書」「秘閣図書之章」「内閣文庫」

【刊年・刊行者】

刊記がないため、詳細は不明。寛永整版本の後印か。

【五】保元物語 貞享二年刊 三冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇三・〇一六九」

拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題①」(『北の丸』第四五号、平成二五年) 参照のこと。

【六】参考保元物語 刊年不明 九冊

太政官正院地志課・地理寮地誌課・内務省地理局

「請求番号一六七・〇〇一四」

本資料は軍記物語『保元物語』の注釈書である『参考保元物語』の版本。

三巻九冊。袋綴。『参考平治物語』と合刻であり、本資料は請求番号一六七・〇〇三八のツレ。元禄六年版の後刷か。

水戸藩では徳川光圀の命により、『大日本史』編纂などの修史事業が行われたが、本書もその中のひとつで、『参考源平盛衰記』や『参考太平記』等との一連の著作である。そのため史実の考証に主眼が置かれており、物語表現としての考察などは多くなく、『保元物語』が歴史書のひとつとして受容されていた様子を示すものである。底本には版本系統の本文が用いられ、

杉原本・京師本・鎌倉本・半井本・岡崎本の五つの諸本との異同が比較検討されている。なお、このうちの岡崎本は、現在所在不明となっており、本書の記載が貴重な資料となる。凡例には『保元物語』の作者を中原師梁とする独自の説を立てる。

表紙・題簽ともに原装のままと推定される。

【書誌】

外題・「参考保元物語」左肩四周双边刷題簽(二八・三糎×三・五糎)

内題・「参考保元物語」

表紙・赤茶色卍繫地雲文艶出表紙(二五・五糎×一八・〇糎)

見返し・封面「江府書肆 松雲齋／参考保元物語／京師書堂 柳枝軒」

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・四周双边(二一・〇糎×一四・八糎)、無界

墨付丁数・①四八丁、②三二丁、③三九丁、④六九丁、⑤三八丁、⑥五

五丁、⑦三八丁、⑧四八丁、⑨二九丁

印記・「地誌備用図籍之記」「日本政府図書」(各冊一才)

【刊年・刊行者】

本資料は『参考平治物語』と合刻のため、刊記は『参考平治物語』(請求番号一六七・〇〇三八)の末尾に記載されている。これについては『参考平治物語』(請求番号一六七・〇〇三八)の項で述べる。

【七】参考保元物語 元禄六年刊 三冊

旧蔵者不明 「請求番号一六七・〇〇三三」

本資料は前掲資料と同版の『参考保元物語』である。『参考平治物語』（請求番号一六七・〇〇三二）のツレ。袋綴。合冊されて三巻三冊。

各冊一丁目に旧蔵者のものと思われる「賞雪堂図書之印」（四・〇糶×一・五糶、長方陽刻）の印が捺されている。見返しは封面で「江府書肆 松雲齋／参考保元物語／京師書堂 柳枝軒」とあるのは前掲資料と同じだが、直径六糶の魁星印、ほか印記二種あり。

外題は左肩に香色の料紙に墨書で出しているが、第三冊目のみ下部が欠けている。

また第一冊目の二九才・三〇才に旧蔵者のものと見られる附箋が貼付されている。

【書誌】

外題・「参考保元物語 一（一）（三二）」左肩香色料紙題簽（一八・五糶×四・三糶）に墨書

内題・「参考保元物語」

表紙・砥粉色布目型押表紙（二五・七糶×一九・〇糶）

見返し・封面「江府書肆 松雲齋／参考保元物語／京師書堂 柳枝軒」

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・〇糶

匡郭・四周双边（二一・〇糶×一四・八糶）、無界

墨付丁数・①一三〇丁、②一六二丁、③一一五丁

印記・「日本政府図書」（蔵書票、遊紙）「秘閣図書之章」（甲、①一才）

「秘閣図書之章」（乙）「日本政府図書」「賞雪堂図書之印」（各冊一才）

【刊年・刊行者】

本資料は『参考平治物語』と合刻のため、刊記は『参考平治物語』（請求番号一六七・〇〇三二）の末尾に記載されている。これについては『参考平治物語』（請求番号一六七・〇〇三二）の項で述べる。

【八】参考保元物語 天保一〇年刊 八冊

元老院旧蔵 「請求番号一六七・〇〇三四」

本資料は天保一〇年版の『参考保元物語』で、『参考平治物語』（請求番号二〇三・〇一六七）とツレ。袋綴。三巻八冊。

『参考保元物語』は、一巻が上・中・下の三冊で、三巻九冊となっている場合が多いが、本資料の場合は巻二が上下二冊になっているため全八冊。

①一才に蔵書印「元老院図書記」「太政官文庫」「静斎蔵書」（四・一糶×二・三糶、長方陽刻）の三種が捺されている。元老院以前の旧蔵者についてははっきりしない。同じ「静斎蔵書」の印が国文学研究資料館が所蔵する『京の水』（秋里籬島編、下河辺拾水画）に捺されている。

外題は四周双边の刷題簽（一八・五糶×三・七糶）で貼付されているが、第一冊目は一部剥落している。

また前掲資料と異なり、本資料の見返しに封面はない。

【書誌】

外題・「参」考保元物語 一上（一三下）左肩四周双边刷題簽（一八・五糶×三・七糶）

内題・「参考保元物語」

表紙・代赭色表紙（二五・〇糶×一八・〇糶）

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・四周双辺（二一・〇糎×一四・八糎）、無界

墨付丁数・①四七丁、②三二丁、③三八丁、④六九丁、⑤五四丁、⑥三八丁、⑦四七丁、⑧二九丁

印記・「元老院図書記」「太政官文庫」「静斎文庫」（①一才）

【刊年・刊行者】

本資料は『参考平治物語』と合刻のため、刊記は『参考平治物語』（請求番号二〇三・〇一六七）の末尾に記載されている。これについては『参考平治物語』（請求番号二〇三・〇一六七）の項で述べる。

【九】参考保元物語 刊年不明 九冊

教部省旧蔵 「請求番号一六七・〇〇三五」

本資料は元禄六年版の『参考保元物語』の再版で、『参考平治物語』（請求番号一六六・〇三五七）のツレ。袋綴。九冊。

本資料は教部省の旧蔵で、各冊の第一丁目に「宣教使」「教部省文庫印」の印が捺されている。表紙・題簽ともに前掲の『参考保元物語』（請求番号一六七・〇〇一四）と同じで、原装のままと考えられる。見返しの封面も同様で、「江府書肆 松雲斎／参考保元物語／京師書堂 柳枝軒」とある。但し、魁星印等の印記は見られない。

【書誌】

外題・「参」考保元物語 一上（～三下）「左肩四周双辺刷題簽（一八・三糎×三・七糎）」

内題・「参考保元物語」

表紙・赤茶色巾繫地雲文艶出表紙（二五・五糎×一八・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・四周双辺（二一・〇糎×一四・八糎）、無界

墨付丁数・①三六丁、②三三丁、③三九丁、④六九丁、⑤三八丁、⑥五五丁、⑦三八丁、⑧四八丁、⑨二九丁

印記・「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」「太政官文庫」「日本政府図書」「内一二五九三号」

【刊年・刊行者】

本資料は『参考平治物語』と合刻のため、刊記は『参考平治物語』（請求番号一六六・〇三五七）の末尾に記載されている。これについては『参考平治物語』（請求番号一六六・〇三五七）の項で述べる。

【一〇】参考保元物語 刊年不明 九冊

浜松藩克明館旧蔵 「請求番号二〇三・〇一六八」

本資料は元禄六年版『参考保元物語』の後刷で、『参考平治物語』（請求番号一六七・〇〇三一）のツレ。共に浜松藩校克明館に所蔵されていたものである。袋綴。九冊。

本資料には各冊それぞれに浜松藩克明館の蔵書印が二種ずつ捺印されている。見返と裏見返に縦型の「克明館文庫印」（九・〇糎×六・〇糎）、藍色陽刻印）、各冊の最初の二丁と最後の二丁の天に横型の「克明館蔵書」（二・

二糎×八・〇糎、藍色陽刻印)が見える。ほかに各冊一丁目に円型の墨印「書林 松本」(直径二・〇糎)、各冊一丁目右下に「惜陰堂藏書印」(二・五糎×一・八糎、長方陽刻印)がある。おそらく克明館から流出したのち、貸本屋などを経てから当館の所蔵となったことが類推される。

克明館は弘化二年の設置で、教官としては名倉松窓(予何人)が著名である。近世後期に藩の財政が大きく傾いた際、人材養成・登用が急務となり、水野忠邦の時代に藩校として経誼館が設置された。それに引き続き、井上正春・正直の時代に設置されたのが克明館である。町人の子弟にも門戸が開かれていたことで知られる。当館には克明館旧蔵書がいくつか所蔵されており、例えば『大和物語』(請求番号二〇三・〇〇六二)もそのひとつである。

【書誌】

外題・「参考保元物語 一上(〜三下)」左肩四周双边刷題簽(一八・五糎×三・五糎)

内題・「参考保元物語」

表紙・代赭色表紙(二五・五糎×一八・二糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・四周双边(二一・〇糎×一四・八糎)、無界

墨付丁数・①三六丁、②三三丁、③三九丁、④六九丁、⑤三八丁、⑥五五丁、⑦三八丁、⑧四八丁、⑨三三丁

印記・「克明館文庫印」(九・〇糎×六・〇糎、藍色陽刻印)、「克明館藏書」(二・二糎×八・〇糎、藍色陽刻印)が見える。「書林 松本」(直径二・〇糎、円型陽刻墨印)、「惜陰堂藏書印」(二・五糎×一・八糎、長方陽刻印)

【刊年・刊行者】

本資料は『参考平治物語』と合刻のため、刊記は『参考平治物語』(請求番号一六七・〇〇三二)の末尾に記載されている。これについては『参考平治物語』(請求番号一六七・〇〇三二)の項で述べる。

【一一】参考保元物語 元禄六年刊 一二冊

浅草文庫旧蔵 「請求番号一六七・〇〇三二」

本資料は元禄六年版『参考保元物語』だが、卷三中・下を欠き、かつ卷一上を欠いた『参考平治物語』と組み合わせられているため、一二冊。袋綴。

各冊一丁目に「日本政府図書」と「浅草文庫」の蔵書印が捺されている。それ以前の旧蔵者については不明。

【書誌】

外題・①〜⑦「参考保元物語 (一上)(〜三下)」、⑧〜⑫「参考平治物語 一下(〜三下)」左肩四周双边刷題簽(一八・〇糎×三・八糎)

内題・「参考保元物語」

表紙・紺色表紙(二六・五糎×一八・〇糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・四周双边(二一・〇糎×一四・八糎)、無界

墨付丁数・①四七丁、②三二丁、③三九丁、④六九丁、⑤三八丁、⑥五五丁、⑦三八丁、⑧四八丁、⑨三三丁、⑩四四丁、⑪五八丁、⑫四一丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」

【刊年・刊行者】

『参考平治物語』の末尾である⑫四一ウに刊記あり。四周単辺の枠（四・〇糎×五・三糎）内。「武江書肆富野治右衛門勝武／元禄六癸酉年十一月十三日 寿梓／京兆書林茨城多左衛門方道」

京の茨城多左衛門方道は、小川多左衛門（小河屋、柳枝軒）として知られる書肆で、本書を手掛けた方道は二代目。京六角通に店を構えていた。曹洞宗御用書林。

【一二】平治物語 江戸時代前期書写 三冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇一七五」

本資料は軍記物語『平治物語』の写本。三冊。袋綴。前掲『保元物語』（請求番号二〇三・〇一七四）のツレ。

『平治物語』は、院の近臣である藤原信頼と信西入道の政治的対立から勃発した平治の乱を描く。悪源太義平の超人的な活躍を中心に、源義朝の謀殺、源頼朝の配流など平治の乱の顛末が描かれる。『保元物語』の姉妹編として捉えられ、多くの写本・版本が『保元物語』『平治物語』を一組とみなしてきた。

本資料も『保元物語』（請求番号二〇三・〇一七四）と同じ装丁、同じ題簽、同じ筆跡などの観点から、ツレであることがわかる。本文は金刀比羅本系統。

【書誌】

外題・①③「平治物語 上（下）」左肩布目型押雲母引料紙題簽（二

〇・五糎×四・〇糎）

内題・「平治物語」

表紙・香色表紙（二九・〇糎×二一・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二五・五糎

匡郭・無辺無界

墨付丁数・①三四丁、②三六丁、③三五丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「書籍館印」「和学講談所」

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たず、写年・書写者ともに不明。筆跡などから見て、江戸時代前期の写かと推定される。

【一三】平治物語 江戸時代前期書写 三冊

井上頼圀旧蔵 「請求番号特〇四六・〇〇〇七」

本資料は軍記物語『平治物語』の写本。綴葉装。三冊。『保元物語』（請求番号特〇四六・〇〇〇六）とツレ。

前掲『保元物語』（請求番号特〇四六・〇〇〇六）と同じ、紺に金泥で秋草文様の描かれた表紙（二四・七糎×一七・五糎）を持ち、左肩に朱色地に金泥で秋草文様を施した題簽（一五・七糎×二・七糎）に墨書で外題が出されている。見返しも布目紙に金切箔と銀砂子の装飾で、本文料紙も斐楮混ぜ漉きの厚手の料紙や布目紙で、前掲『保元物語』（請求番号特〇四六・〇〇〇六）に共通し、一緒に木製の箱（二七・五糎×二〇・〇糎×七・

五糎)に入れられている。箱の蓋には中央に銀泥で「保元平治」とあり。本文は古活字版系統であると考えられる。

本資料の第一丁目に井上頼圀の蔵書印「井上氏」(二・〇糎×二・〇糎)が捺されている。

【書誌】

外題・①「平治ものかたり 一」、②「平治ものかたり 二」、③「平治物語 三」左肩朱色地金泥秋草文様料紙題簽(一五・七糎×二・七糎)に墨書

内題・「平治物語」

表紙・紺地金泥秋草文様表紙(二四・七糎×一七・三糎)

見返し・金切箔銀砂子布目型押料紙

料紙・斐楮混ぜ漉き紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①五二丁、②五二丁、③六〇丁

印記・「日本政府図書」「井上氏」(二・〇糎×二・〇糎)

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。体裁や筆跡から見て、江戸時代前期の写と想像される。

【一四】平治物語(半井本) 写年不明 三冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇一七三」

本資料は軍記物語『平治物語』の写本で、「内閣文庫蔵半井本」として知られるもの。三巻三冊。袋綴。『保元物語』(請求番号二〇三・〇一七二)、『保元平治物語附録』(請求番号二〇三・〇一七二)とツレ。

前掲『保元物語』(請求番号二〇三・〇一七二)の項で示した通り、本資料は半井通仙院旧蔵書からの転写本であると推定されている。『保元物語』において半井本は最も古態を留めると考えられているが、『平治物語』では陽明文庫本が最も古く、半井本はほかの諸本の本文へと変化していく過渡的な位置にあると考えられている。本文は凡そ金刀比羅本と共通するが、「唐僧来朝」などの記事に一部違いがある。

外題は、第一冊目のみ四周双辺の刷題簽が用いられているが、第二冊以降は、『保元物語』(請求番号二〇三・〇一七二)と同じ金の題簽に墨書されている。各冊一丁目右下には「玄圃斎蔵」の朱印があり、同じ印記が鹿児島大学附属図書館の『参考保元平治物語』にある。

【書誌】

外題・①「平治物語 半井氏家蔵 上」左肩四周双辺刷題簽(二七・〇糎×三・四糎)に墨書、②③「保元物語 半井氏家蔵 中(下)」左肩金色料紙題簽(一八・〇糎×三・五糎)に墨書

内題・「保元物語」

表紙・香色表紙(二七・〇糎×一九・五糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①二六丁、②三七丁、③四五丁

印記・「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」

「玄圃斎蔵」「内閣文庫」

【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。

【一五】平治物語 刊年不明 三冊

元老院旧蔵 「請求番号二〇三・〇一七〇」

本資料は軍記物語『平治物語』の版本。袋綴。三巻三冊。『保元物語』と合刻だったと想像されるが、本資料のツレと思われる『保元物語』は当館に伝わっていない。

漢字片仮名交じりの本文、每半葉一一行、版心（中黒口、花口魚尾）などの特徴から見て、寛永整版の後印（無刊記本）であると考えられる。

表紙は鉄色だが、第一冊目と第二冊目の裏表紙は黄茶色。第一冊目と第二冊目・第三冊目の題簽の大きさが異なっており、外題の筆跡も異なる。繰り返し修復の手が加えられていることがわかる。

一丁目に「元老院図書記」の朱印あり。

【書誌】

外題・①「平治物語」左肩四周双边刷題簽（二二・〇糎×三・〇糎）、②

③「平治物語 地（人）」左肩四周双边刷題簽（二六・五糎×二・八糎）

内題・「平治物語」

表紙・鉄色表紙（二七・〇糎×一八・八糎）（※①②裏表紙のみ黄茶色）

料紙・楮紙

行数・每半葉一一行

字面高さ・二一・二糎

匡郭・四周双边（二一・二糎×一五・七糎）、無界

墨付丁数・①三四丁、②三六丁、③三六丁

印記・各冊一才「元老院図書記」

【刊年・刊行者】

本資料は刊記を持たないため、刊年・刊行者ともに不明。

【一六】平治物語 刊年不明 一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号一六七・〇〇三六」

本資料は軍記物語『平治物語』の版本。袋綴。全三巻三冊を合冊して全一冊。漢字片仮名交じりの本文、每半葉一一行、版心（中黒口、花口魚尾）などの特徴から見て、寛永整版の後印（無刊記本）であると考えられる。

また三巻三冊が合冊されて全一冊となっていることや、縹色表紙、四周双边の刷題簽などが共通する点から見て、『保元物語』（請求番号一六七・〇〇二七）のツレであると考えられる。

【書誌】

外題・「平治物語」左肩四周双边刷題簽（二八・〇糎×三・五糎）

内題・「平治物語」

表紙・縹色表紙（二七・〇糎×一八・七糎）

見返し・「日本政府図書」（蔵書票）貼付

料紙・楮紙

行数・每半葉一一行

字面高さ・二一・七糎

匡郭・四周双边（二一・七糎×一六・七糎）

墨付丁数・一〇六丁

印記・「秘閣図書之章」

【刊年・刊行者】

本資料は無刊記のため、正確な刊年は不明。寛永整版の後印である。

【一七】平治物語 貞享二年刊 三冊

内務省旧蔵 「請求番号一六七・〇〇三〇」

拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題①」（『北の丸』第四五号、平成二五年）参照のこと。

【一八】参考平治物語 元禄六年刊 三冊

平田篤胤・鉄胤旧蔵 「請求番号一六七・〇〇三二」

本資料は『平治物語』の注釈書『参考平治物語』である。『参考保元物語』（請求番号一六七・〇〇三三）のツレ。袋綴。合冊されて三巻三冊。

『参考平治物語』は、水戸光圀の命によつて『参考保元物語』と合刻された注釈書である。底本は流布本で、京師本・杉原本・鎌倉本・半井本・岡崎本の異同を比較している。『参考保元物語』と重複する内容は省いているのが特徴。『参考保元物語』同様、史実考証に主眼を置き、多くの史書・日記・説話を引用している。

第一冊目の一丁目に旧蔵者のものと思われる「賞雪堂図書之印」（四・〇糶×一・五糶、長方陽刻）の印が捺されている。この印は『参考保元物語』

（請求番号一六七・〇〇三二）と共通だが、ほかに『参考保元物語』には見られない「平田氏記」（二・五糶、正方陽刻朱印）、不明印記二種（各〇・八糶×一・〇糶、長方陽刻朱印）の印が見られる。このうち「平田氏記」は、平田篤胤・鉄胤の蔵書印として知られるものである。（同じ印を使用していたと思われる、いずれの旧蔵かははっきりしない）この「平田氏記」印は、題簽にも押印されている。

砥粉色の布目紙の表紙や香色の題簽などから見て、『参考保元物語』（請求番号一六七・〇〇三二）のツレと見て間違いないが、それぞれ旧蔵者の異なる本を取り合わせて装丁した可能性も否定できない。ただ、『参考保元物語』（請求番号一六七・〇〇三二）の題簽は一部が欠けており、本来はこの部分に「平田氏記」印があった可能性もある。

見返しは封面で「江府書肆 松雲齋／参考平治物語／京師書堂 柳枝軒」とある。直径六糶の魁星印、ほか印記二種あり。

【書誌】

外題・「参考平治物語 一（三）左肩香色料紙題簽（一八・七糶×四・二糶）に墨書

内題・「参考平治物語」

表紙・砥粉色布目型押表紙（二五・七糶×一八・八糶）

見返し・封面「江府書肆 松雲齋／参考平治物語／京師書堂 柳枝軒」

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・〇糶

匡郭・四周双边（二一・〇糶×一四・八糶）、無界

墨付丁数・①八三丁、②七八丁、③二〇九丁

印記・「日本政府図書」（蔵書票、遊紙）「秘閣図書之章」（甲）「秘閣図書

之章」(乙)「日本政府図書」「賞雪堂図書之印」「平田氏記」(各冊一才)不
明朱印(〇・八糎×一・〇糎)

【刊年・刊行者】

③に刊記あり。四周単辺の枠(一四・〇糎×五・三糎)内。

「武江書肆富野治右衛門勝武」元禄六癸酉年十一月十三日 寿梓／京兆書
林茨城多左衛門方道」

京の茨城多左衛門方道は、小川多左衛門(小河屋、柳枝軒)として知ら
れる書肆で、本書を手掛けた方道は二代目。京六角通に店を構えていた。

【一九】参考平治物語 元禄六年後刷 六冊

太政官正院地志課・地理寮地誌課・内務省地理局

「請求番号一六七・〇〇三八」

本資料は軍記物語『平治物語』の注釈書である『参考平治物語』の版本。
三卷六冊。袋綴。『参考保元物語』と合刻であり、本資料は請求番号一六七
・〇〇一四のツレ。

表紙・題簽ともに原装のままと推定される。第二冊目(二三才)に附箋
(一二・二糎×三・二糎)が貼付されており、朱書で「平治元年十二月廿
日」とある。

【書誌】

外題・「参考平治物語」左肩四周双辺刷題簽(一八・五糎×三・八糎)

内題・「参考平治物語」

表紙・赤茶色卍字繫地雲文艶出表紙(二五・五糎×一八・〇糎)

見返し・封面「江府書肆 松雲齋／参考保元物語／京師書堂 柳枝軒」

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・四周双辺(二一・〇糎×一四・八糎)、無界

墨付丁数・①三八丁、②四七丁、③三六丁、④四三丁、⑤五八丁、⑥五
二丁

印記・「地誌備用図籍之記」「日本政府図書」(各冊一才)

【刊年・刊行者】

本資料は『参考平治物語』(請求番号一六七・〇〇一四)と合刻のため、
刊記は本資料の末尾に記載されている。前掲資料同様、⑥五一ウの四周単
辺(一四・〇糎×五・三糎)の枠内に三行書きで「武江書肆富野治右衛門
勝武」元禄六癸酉年十一月十三日 寿梓／京兆書林茨城多左衛門方道」と
ある。

前掲資料と異なり、⑥五二オ(見返し)に「六角通御幸町西入町／京師
書林 柳枝軒 茨城多左衛門」とある。書風も異なることから、再版の際
の刊記と推定される。

【二〇】参考平治物語 刊年不明 六冊

浜松藩克明館旧蔵 「請求番号一六七・〇〇三一」

本資料は元禄六年版『参考平治物語』の後刷で、『参考保元物語』(請求
番号二〇三・〇一六八)のツレ。共に浜松藩校克明館に所蔵されていたも
のである。袋綴。六冊。

本資料には各冊それぞれに浜松藩克明館の蔵書印が二種ずつ捺印されて

いる。見返と裏見返に縦型の「克明館文庫印」(九・〇糎×六・〇糎、藍色陽刻印)、各冊の最初の二丁と最後の二丁の天に横型の「克明館蔵書」(二・二糎×八・〇糎、藍色陽刻印)が見える。ほかに凹型の墨印「書林 松本」(直径二・〇糎)、「惜陰堂蔵書印」(二・五糎×一・八糎、長方陽刻印)など『参考保元物語』(請求番号二〇三・〇一六八)と共通。

【書誌】

外題・「参考平治物語 一上(三下)」左肩四周双边刷題簽(一八・五糎×三・五糎)

内題・「参考平治物語」

見返し・封面「江府書肆 松雲齋／参考保元物語／京師書堂 柳枝軒」

表紙・代赭色表紙(二五・五糎×一八・二糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・四周双边(二一・〇糎×一四・八糎)、無界

墨付丁数・①三六丁、②四五丁、③三六丁、④四三丁、⑤五八丁、⑥五

〇丁

印記・「克明館文庫印」(九・〇糎×六・〇糎、藍色陽刻印)、「克明館蔵書」(二・二糎×八・〇糎、藍色陽刻印)「書林 松本」(直径二・〇糎、円

型陽刻墨印)、「惜陰堂蔵書印」(二・五糎×一・八糎、長方陽刻印)

【刊年・刊行者】

⑥五〇ウに四周单边(一四・〇糎×五・三糎)の枠内に三行書きで「武江書肆富野治右衛門勝武／元禄六癸酉年十一月十三日 寿梓／京兆書林茨城多左衛門方道」とあり、元禄六年版であることが推定される。見返し(封面)には「江府書肆 松雲齋／参考保元物語／京師書堂 柳枝軒」。

【二一】参考平治物語 刊年不明 六冊

教部省旧蔵 「請求番号一六六・〇三五七」

本資料は元禄六年版の『参考平治物語』で、『参考保元物語』(請求番号一六七・〇〇三五)のツレ。袋綴。九冊。

本資料は教部省の旧蔵で、各冊の第一丁目に「宣教使」「教部省文庫印」の印が捺されている。表紙・題簽ともに原装と考えられる。但し、魁星印等の印記は見られない。

表紙全体に黴による汚損あり。

【書誌】

外題・「参考平治物語 一上(三下)」左肩四周双边刷題簽(一八・三糎×三・七糎)

内題・「参考平治物語」

表紙・赤茶色卍字繫地雲文艶出表紙(二五・六糎×一八・〇糎)

見返し・封面「江府書肆 松雲齋／参考平治物語／京師書堂 柳枝軒」

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・四周双边(二一・〇糎×一五・〇糎)、無界

墨付丁数・①三七丁、②四七丁、③三六丁、④四三丁、⑤五七丁、⑥五二丁

印記・各冊一才「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」「太政官文庫」「日本政府図書」②⑥一才「内一二五九四号」

【刊年・刊行者】

⑥五一ウの四周単辺（二四・〇糎×五・三糎）の枠内に三行書きで「武江書肆富野治右衛門勝武／元禄六癸酉年十一月十三日 寿梓／京兆書林茨城多左衛門方道」とある。

⑥五二オ（見返し）に「六角通御幸町西入町／京師書林 柳枝軒 茨城多左衛門」とある。書風も異なることから、再版の際の刊記と推定される。

【二二】参考平治物語 天保一〇年刊 六冊

元老院旧蔵 「請求番号二〇三・〇一六七」

本資料は天保一〇年版の『参考平治物語』で、『参考保元物語』（請求番号一六七・〇〇三四）とツレ。袋綴。三巻六冊。

各冊一才に蔵書印「元老院図書記」と、『参考保元物語』（請求番号一六七・〇〇三四）と共通する「静斎蔵書」（四・一糎×二・三糎、長方陽刻印）の二種が捺されている。

外題は四周双边の刷題簽（一八・五糎×三・七糎）で貼付されているが、各冊に剥落が見られる。

本資料の見返しに封面はなく、表紙は改装と思われる。特に第一冊目の表紙は煤による汚損で黒く変色している。

【書誌】

外題・「参」考平治物語 一上（三下）左肩四周双边刷題簽（一八・五糎×三・七糎）

内題・「参考平治物語」

表紙・代赭色表紙（二四・五糎×一七・五糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉九行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・四周双边（二一・〇糎×一四・八糎）、無界

墨付丁数・①三七丁、②四七丁、③三六丁、④四三丁、⑤五八丁、⑥五

一丁

印記・「元老院図書記」「静斎文庫」

【刊年・刊行者】

⑥五〇ウに四周単辺（二四・〇糎×五・三糎）の枠内に三行書きで「武江書肆富野治右衛門勝武／元禄六癸酉年十一月十三日 寿梓／京兆書林茨城多左衛門方道」とある。

⑥五一オ（裏見返し）には別筆で以下の刊記あり。

「天保十己亥年／江戸 浅草茅町二丁目 須原屋伊八／大阪 心斎橋博勞町 伊丹屋善兵衛」

四周単辺（一九・五糎×一四・〇糎）の枠内に「歴代事跡図」「閩史約書」等の広告と共に出されている。

【二三】（保元平治物語附録）（半井本） 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇一七二」

本資料は「内閣文庫蔵半井本」として知られる『保元物語』（請求番号二〇三・〇一七二）『平治物語』（請求番号二〇三・〇一七三）に附属する一冊。袋綴。

序文によれば、『保元物語』（請求番号二〇三・〇一七二）『平治物語』（請

求番号二〇三・〇一七三)が、『参考保元物語』『参考平治物語』で紹介された半井本の系統であることを明らかにした上で、版本との本文異同についてまとめたものが本資料に当たる。

一才に『保元物語』(請求番号二〇三・〇一七二)『平治物語』(請求番号二〇三・〇一七三)と同じ「玄圃斎蔵」の印がある。

香色表紙は『保元物語』(請求番号二〇三・〇一七二)『平治物語』(請求番号二〇三・〇一七三)に共通したもので、四周双边の刷題簽は『平治物語』(請求番号二〇三・〇一七三)の第一冊目と同じだが、墨書されている外題については筆跡が異なっている。

【書誌】

外題・保元平治物語附録 半井氏家蔵 全「左肩四周双边刷題簽(一六・七糎×三・五糎)」に墨書

内題・なし

表紙・香色表紙(二七・〇糎×一九・五糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉五行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・每半葉五行

印記・「大学蔵書」「和学講談所」「玄圃斎蔵」「浅草文庫」「書籍館印」「日本政府図書」(一才)「内閣文庫」(九ウ)

【写年・書写者】

序文末尾には「于時／寛延四辛未年仲春／半井本再校シテ改之」とある。

奥書などはなく、正確な写年・書写者は不明。

【二四】平家物語 明暦二年刊 七冊

教部省旧蔵 「請求番号二〇三・〇一五三」

拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題①」(『北の丸』第四五号、平成二五年)参照のこと。

【二五】平家物語 刊年不明 一二冊

元老院旧蔵 「請求番号一六七・〇〇四」

拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題①」(『北の丸』第四五号、平成二五年)参照のこと。

【二六】平家物語 寛永三年刊 一一冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇三・〇一五〇」

本資料は軍記物語『平家物語』の寛永三年版で、昌平坂学問所の旧蔵。目録には「巻二欠」とあるが、実際には巻三を欠いて、一一冊。袋綴。

本文は漢字片仮名交じり文で、目録には「一方検校本」とあるが、その中でもいわゆる流布本に分類されるものである。各冊一丁目に目録。

鉄色表紙の左肩に朱の打付書で外題がある。第三冊目の左肩に元題簽の痕跡があり、「平家」という部分のみ可読。朱書の外題は題簽が脱落したあとに補われたものであると想像できる。第五冊目・第七冊目の裏表紙が新

しいものに補修されており、それぞれ代赭色・烏ノ子色。

版心は中黒口・花口魚尾で「平家」とある。

各冊見返し右下に「乗願寺」(六・五糎×二・七糎)の墨印(陰刻)あり。

この印の上には墨書があり、それが上から墨で塗りつぶされている。判読は定かではないが、おそらく元は「河内 乗原」とあったようである。他に各冊一丁目のオモテには「大学校図書之印」「日本政府図書」「浅草文庫」の印が捺されている。第九冊目を除いた各冊の末尾には「昌平坂学問所」(墨印)「文化戊辰」の印あり。これによれば本資料は文化五年に昌平坂学問所に収められたものである。

【書誌】

外題・「平家物語 一(〜十二)」左肩打付朱書

内題・「平家物語」

表紙・鉄色表紙(二八・〇糎×一九・五糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉二二行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・四周双边(二二・〇糎×一六・七糎)

墨付丁数・①四三丁、②四八丁、③四二丁、④三八丁、⑤三二丁、⑥四

〇丁、⑦三四丁、⑧五一丁、⑨四四丁、⑩四八丁、⑪四四丁

印記・「乗願寺」「大学校図書之印」「日本政府図書」「浅草文庫」「昌平坂

学問所」「文化戊辰」

【刊年・刊行者】

第一一冊目の四四オウウに跋文あり。跋文の年記は以下の通り。

「寛永三・寛南呂吉辰／一条室町菊池五兵衛」

これによれば寛永三年の出版と考えられる。

また各冊の末尾左下には次のような墨書がある。

「于時寛永七年二月下旬 乗願寺」

また第六冊目にはこの墨書の右横に「明治二年六月下旬」と墨書されている。

【二七】平家物語 万治二年刊 一二冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号二〇三・〇一五二」

本資料は軍記物語『平家物語』の寛永三年版を、万治二年に再版したものの袋綴。一二冊。

本資料は紅葉山文庫旧蔵書に多い縹色表紙(後補)で、左肩に四周双边の刷題簽で「平家物語 巻第一(〜巻第十二)」と外題がある。

本文は寛永三年版と同一の版面で、版心も中黒口・花口魚尾。但し、前掲資料と異なって跋文を欠き、本文末尾に刊記が添えられている。

第一冊目の見返しに「日本政府図書」の蔵書票あり。ほか各冊一丁目のオモテに「日本政府図書」、各冊最終丁ウラに「内閣文庫」「日本政府図書」の印がある。

【書誌】

外題・「平家物語 巻第一(〜巻第十二)」左肩四周双边刷題簽(一七・

二糎×三・三糎)

内題・「平家物語」

表紙・縹色表紙(二七・〇糎×一八・二糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉二二行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・四周双边（二二・〇糎×一六・七糎）

墨付丁数・①四三丁、②四八丁、③四二丁、④四二丁、⑤三八丁、⑥三一丁、⑦四〇丁、⑧三四丁、⑨五一丁、⑩四四丁、⑪四八丁、⑫四四丁
印記・「日本政府図書」（①一才蔵書票）「日本政府図書」（各冊一才、最終丁ウ）「内閣文庫」（最終丁ウ）

【刊年・刊行者】

⑫四三ウ、本文末尾に次の通り刊記がある。

「万治二己亥曆仲秋上旬」

本文や前掲資料の刊記とは筆跡が異なり、入木と想像される。版元についての記載はない。

【二八】平家物語 天和二年刊 一二冊

内務省旧蔵 「請求番号一六七・〇〇三七」

拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題①」（『北の丸』第四五号、平成二五年）を参照のこと。

【二九】平家物語 天和二年刊 一一冊

外務省旧蔵 「請求番号二〇三・〇一五一」

拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題①」（『北の丸』第四五号、平成二五年）を参照のこと。

【三〇】平家物語 慶長年間刊か 一二冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号特一二五・〇〇〇一」

本資料は軍記物語『平家物語』の慶長古活字版で、「下村本」と称されるものである。一二巻一二冊。袋綴。

水浅葱色表紙に、左肩に外題「平家物語 一（十二）」と打付書されている。全体に幅広な紙面に美麗な活字を用いているのが特徴で、慶長年間の特徴的な書風である。『平家物語』は早い段階から古活字を用いた出版が始まるが、そのうち「下村本」は初期の印刷に当たる。

見返しには、万年筆で書かれた川瀬一馬氏のメモ（一五・〇糎×一四・〇糎）が貼付されている。内容は次の通り。

「下村時房刊本現存せるもの左の如し／松井簡治博士本 尊経閣文庫／静嘉堂文庫／岩崎文庫（二本）／刈谷町立図書館本（欠、本二冊）／東北帝大（旧狩野本）本／久原文庫本／東京書肆 南陽堂ニテ一見ノ本／以上／昭和五年 川瀬一馬」

このメモの末尾には「樋口」（二・一糎×〇・九糎）の楕円型陽刻朱印が捺されている。また、このメモは万年筆で書かれたものと見られるが、ほかの文字がすべて黒いインクであるのに対し、「尊経閣文庫」の部分のみ青いインクである。なお川瀬一馬氏は『古活字版之研究』の下村本の項目にはこのメモ以上に現存資料を挙げている。

各冊いずれも第一丁目のオモテに「大学校図書印」「日本政府図書」「浅草文庫」の蔵書印が捺されており、また本文冒頭および末尾に「図書局文庫」の印が見える。また本文末尾には「日本政府図書」「昌平坂学問所」「文

政癸未」の印があり、本資料が文政六年に昌平坂学問所に収められたことがわかる。なお「昌平坂学問所」の墨印は表紙の右肩にも捺されている。

【書誌】

外題・「平家物語 一（〜十二）」左肩打付墨書

内題・「平家物語」

表紙・薄浅葱色表紙（二八・三糎×二〇・五糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①七八丁、②九一丁、③八一丁、④七八丁、⑤六六丁、⑥五六丁、⑦七〇丁、⑧五九丁、⑨九二丁、⑩七六丁、⑪七八丁、⑫七八丁

印記・「大学校図書印」「日本政府図書」「浅草文庫」「図書局文庫」「昌平坂学問所」「文政癸未」

【刊年・刊行者】

⑫七八ウに「下村時房刊之」とあるが、刊行者下村時房については伝未詳。全体の書風や印刷の形態などから慶長年間の刊行と考えられる。

【三一】平家物語 慶長年間刊か 一二冊

和学講談所旧蔵 「請求番号特一二五・〇〇〇二」

本資料は前掲資料と同じ『平家物語』の古活字版で、「下村本」と称されるもの一つである。袋綴。一二冊。

本資料の見返しにも川瀬一馬氏によるメモ（二四・〇糎×一〇・〇糎）

が貼付されている。万年筆の黒インクによるもので、次の通りである。

「下村時房本／本書は平家物語考二載セラレタル本ナリ／他に一見セシモノ九本アル由ハ本庫蔵他一本／ニ添書セリ／昭和五年／川瀬一馬記」

メモの末尾に「樋口」（一・一糎×〇・九糎）の楕円型陽刻朱印あり。メモの言う「平家物語考」は山田孝雄『平家物語考』のことで、また「本庫蔵他一本」とは前掲資料のことである。

版面の磨滅の程度から判断して、前掲資料とほぼ同じ時期の印刷であろうと推定される。前掲資料より状態が良く見えるが、いずれかの段階で大掛かりな修復を施されたようである。全体は香色表紙だが、第四冊目の裏表紙だけ黄檗色。第一冊目の表紙は特に状態が悪く、題簽も脱落しており、左肩に外題が打付書されている。第二冊目以降は、左肩に雲紙の題簽があり「平家物語 二（〜十二）」と墨書されている。

各冊第一丁目に「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」の印が捺されており、また本文冒頭に「内閣文庫」印、本文末尾に「内閣文庫」「日本政府図書」の印がある。

【書誌】

外題・①「平家物語 一」左肩打付墨書、②③④「平家物語 二（〜十

二）」左肩雲紙題簽（二七・五糎×四・二糎）に墨書

内題・「平家物語」

表紙・香色表紙（二八・五糎×二〇・四糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①七八丁、②九一丁、③八一丁、④七八丁、⑤六六丁、⑥五

六丁、⑦七〇丁、⑧五九丁、⑨九二丁、⑩七六丁、⑪七八丁、⑫七八丁

印記・「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」「内閣文庫」

【刊年・刊行者】

⑫七八ウに「下村時房刊之」とあり、前掲資料と同版と推定される。

【三二】平家物語 慶長年間刊 一二冊

内務省地理局旧蔵 「請求番号特一二四・〇〇〇三」

本資料は前掲資料と同じ『平家物語』の古活字版で、「下村本」と称されるもののひとつ。

第一冊目の汚損が激しく、表紙色や題簽についての判別が難しい。第二冊目以降は、江戸時代前期に特徴的な丹表紙や、金砂子による装飾のある題簽が見て取れる。第一冊目には「平家物語 巻第一」と外題があるのが、かろうじて判別でき、ほかの冊次にもこれと同様の外題となっているが、第二冊目・第四冊目・第六冊目・第一〇冊目だけは「平氏物語 巻第二（巻第二・巻第四・巻第六・巻第十）」となっている。但し題簽の筆跡は同筆である。第九冊目・第一一冊目・第一二冊目のみ題簽が脱落しており、中央に打付書で外題が記されており、これに関しては別筆である。

各冊一丁目のオモテに「日本政府図書」と「地誌備用図籍之記」の捺印あり。これにより内務省地理局の旧蔵とわかる。但し、各冊の末尾には「浄興寺」の墨書および、同旧蔵者ともものと推定される正方陽刻印（一・〇糎）と円型陽刻印（一・五糎）の墨印がある。

【書誌】

外題・①③⑤⑦⑧「平家物語 巻第一（巻第三・巻第五・巻第七・巻第

八）」中央縹色雷門繫地金砂子料紙題簽（二六・八糎×三・五糎）に墨書、

②④⑥⑩「平氏物語 巻第二（巻第四・巻第六・巻第十）」中央縹色雷門繫

地金砂子料紙題簽（一六・八糎×三・五糎）に墨書、⑨⑪⑫「平家物語 巻

第九（第十一・巻第十二）」中央打付墨書

内題・「平家物語」

表紙・朱色雷文襷雨龍艶出表紙（二八・〇糎×二〇・三糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①七八丁、②九一丁、③八一丁、④七八丁、⑤六六丁、⑥五

六丁、⑦七〇丁、⑧五九丁、⑨九二丁、⑩七六丁、⑪七八丁、⑫七八丁

印記・「地誌備用図籍之記」「日本政府図書」、不明正方陽刻印（一・〇糎）、

円型陽刻印（一・五糎）の墨印がある。

【刊年・刊行者】

⑫七八ウに「下村時房刊之」とあり、前掲資料と同版と推定される。

【三三】平家物語 慶長年間写か 一二冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号特一二四・〇〇〇二」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、一方系藤波本に分類されるもの。袋綴。一二冊。

やや幅広な紺色表紙（二三・〇糎×一八・三糎）はおそらく後補で、全体に水損が見られる。第一冊目には左肩に無地の題簽（一六・三糎×二・

七糎)で「平家物語 一」と墨書されているが、第三冊目・第四冊目は左肩に無地の題簽が貼付されているのみで外題が書かれていない。第六冊目の題簽(一六・五糎×三・〇糎)には「平家物語」とのみあり、巻数が書かれていない。第一一冊目は題簽の大きさが一五・五糎×三・〇糎で、他の冊次と異なる。第一二冊目はそもそも題簽を欠く。

各冊一丁目オモテに「日本政府図書」「浅草文庫」、また各冊本文冒頭に「浅草文庫」の蔵書印がある。本文末尾には「昌平坂学問所」の墨印がある。また第二冊目以降の本文末には「文化丙子」の朱印が見え、文化一三年に昌平坂学問所の所蔵となったことがうかがえる。

【書誌】

外題・①②⑤⑦⑧⑨⑩「平家物語 一(二・三・五・七・八・九・十)」
左肩無地料紙題簽(一六・三糎×二・七糎)に墨書、③④左肩無地料紙題簽(一六・三糎×二・七糎)のみで外題なし、⑥「平家物語」左肩無地料紙題簽(一六・五糎×三・〇糎)に墨書、⑪「平家物語 十一」左肩無地料紙題簽(一五・五糎×三・三糎)

内題・なし

表紙・紺色表紙(二三・〇糎×一八・三糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉一一行

字面高さ・二〇・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①六九丁、②七三丁、③七〇丁、④六四丁、⑤六六丁、⑥五〇丁、⑦八四丁、⑧五五丁、⑨八五丁、⑩八七丁、⑪八三丁、⑫七六丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「昌平坂学問所」「文化丙子」

【写年・書写者】

奥書の記載はなく、正確な写年・書写者は不明。筆跡などから慶長年間頃の写と推定されている。

【三四】平家物語 江戸時代初期写か 一二冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇二五・〇〇〇九」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、一方系葉子七行本と称されるもの。綴葉装。一二冊。

縹色雷文繫艶出表紙(二四・五糎×一八・〇糎)の中央に、香色地の料紙に紅色の霞をのせた題簽(一七・〇糎×三・五糎)が貼付されている。每半葉七行の大きな文字で書写されているのが特徴で、葉子七行本と称される由来となっている。料紙は斐楮混ぜ漉き。

第一冊目の目録のあとに平氏系図を載せる。

蔵書印はなく、第一冊目の見返しに「日本政府図書」の蔵書票が貼付されているのみ。

【書誌】

外題・「平家物語 一(十二)」中央香色地紅色霞料紙題簽(一七・〇糎×三・五糎)に墨書

内題・なし

表紙・縹色雷文繫艶出表紙(二四・五糎×一八・〇糎)

料紙・斐楮混ぜ漉き

行数・每半葉七行

字面高さ・二二・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①一〇五丁、②一一三丁、③九六丁、④一〇二丁、⑤八八丁、⑥七四丁、⑦九五丁、⑧七九丁、⑨一一二丁、⑩一一五丁、⑪一一三丁、⑫一一三丁

印記・「日本政府図書」

【写年・書写者】

奥書の記載はなく、正確な写年・書写者は不明。江戸時代初期の写か。

【三五】平家 天正一八年写 一二冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇九一・〇〇〇六」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、天正一八年に、僧で神道家の梵舜によって書写されたことから通称を「梵舜本」と称する。袋綴。一二冊。

本文は漢字片仮名まじり文で、一方流寛一本系統。各冊冒頭に目録を載せるが、本文は章段毎に分かれてはいない。

紺色表紙の中央に朱色の題簽で、「平家物語巻第一（〜第十二）」と外題を出しているが、内題は「平家」である。題簽の右肩には朱書で「来歴志本」の札が貼付されており、『重訂御書籍来歴志』に記載があることを示す。

第一冊目の見返しに「日本政府図書」の蔵書票が貼付されているほか、各冊一丁目に「秘閣図書之章」の印が見える。これらの特徴から紅葉山文庫旧蔵と考えられる。

【書誌】

外題・「平家物語第一（第十二）」中央朱色題簽（二三・五糎×三・〇糎）に墨書

内題・「平家」

表紙・紺色表紙（二五・三糎×一九・八糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二一・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①四一丁、②五〇丁、③四三丁、④三九丁、⑤四〇丁、⑥三四丁、⑦四二丁、⑧三六丁、⑨四四丁、⑩四九丁、⑪五七丁、⑫五一丁

印記・「日本政府図書」「秘閣図書之章」

【写年・書写者】

第二冊目以降には、梵舜による奥書があり、これにより正確な写年が判明する。

②五〇ウ 「天正十八年二月廿七日筆立三月九日書畢 梵舜（花押）」

③四三ウ 「天正十八年庚寅三月十一日筆立同月十八日書畢 梵舜（花押）」

④三九ウ 「天正十八年正月七日書之畢 梵舜（花押）」

⑤四〇ウ 「天正十八年三月廿日筆立同月廿五日書畢／紙数四十枚／梵舜（花押）」

（花押）

⑥三四ウ 「天正十八年庚寅年三月廿八日筆立卯月六月書畢／紙数卅三枚／

卅八才／梵舜（花押）」

⑦四二ウ 「天正十八年卯月七日筆立同月十七日書畢 梵舜（花押）」

⑧三六才 「天正十八年卯月十九日筆立同月廿四書畢 梵舜（花押）」

⑨四四ウ 「天正十八年正月十三日筆立同月十八日書之／同校合了／梵舜（花押）」

（花押）

⑩四九才 「天正十八年四月廿六日筆立五月八日書畢 梵舜（花押）」

⑪五七ウ 「天正十八年五月十七日筆立同月廿七日書畢 梵舜（花押）」

⑫五一才「天正十八年五月廿九日筆立六月四日書畢 梵舜（花押）」

⑫五一ウ「右十二冊予一筆也此内一四九卷／以余本写之残九冊以仮名之本／片仮名書足テ愚筆之可有誤可謂／後人嘲者也／天正十八年林鐘三月梵舜（花押）」

特に第十二冊目の最終丁にある奥書によれば、本書が全て梵舜自らの筆であること、巻一・巻四・巻九の三冊と残り九冊では異なる本からの書写であったこと、天正一八年六月に全ての書写を終えたこと等がわかる。

また第一冊目・第四冊目には次の通り本奥書を載せる。

①四一才「本云 永正小春二十之日挑寒灯於清涼膳之」

④三九才「本云天正戊寅秋八月廿又二日了」

梵舜は吉田神道を学んだ神道家で、後水尾天皇や徳川家康など多くの人物に神道を講じたことで知られる。豊臣秀吉が没した際には、豊国神社創建に尽力した。同じ神道家として知られる吉田兼見は実兄に当たる。

【三六】平家物語 写年不明 一二冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇三・〇一六一」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、覚一本系統の本文を持つもの。
一二冊。袋綴。

代赭色表紙（二六・五糎×一九・〇糎）の左肩に無地の題簽に「平家 巻（一）」（巻十一）」と外題があるが、第一冊目・第二冊目は一部が剥がれており、第一二冊目は題簽ごと脱落しており、左肩に打付書で「平家 巻一二」とある。第一冊目は題簽の脇に「平家灌頂」と墨書で打付書があり、さらに右肩には朱書で「平家灌頂共十一巻」と打付書が見える。但し、全

体に水損あり。

蔵書印は第一冊目の場合、目録のある一才に「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」、本文の冒頭部分にあたる二才に「図書局文庫」「日本政府図書」「内閣文庫」、本文の末尾にあたる五六ウに「図書局文庫」「日本政府図書」、五七才に「内閣文庫」の捺印がある。第二冊目以降は捺印箇所に微妙な違いが見られるものの、同じ蔵書印が全冊に見られる。

【書誌】

外題・①～⑫「平家 巻（一）」（巻十一）」左肩無地料紙題簽（一五・

二糎×三・五糎）に墨書、⑫「平家 巻十二」左肩打付墨書

内題・「平家」

表紙・代赭色表紙（二六・五糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

行数・每半葉二行

字面高さ・二一・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①五七丁、②六七丁、③五九丁、④五八丁、⑤五四丁、⑥四

六丁、⑦五三丁、⑧四八丁、⑨六八丁、⑩五九丁、⑪七六丁、⑫六八丁

印記・「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」「図書局文

庫」「内閣文庫」

【写年・書写者】

本資料に奥書はなく、正確な写年・書写者については不明。

【三七】平家物語 写年不明 二〇冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号二〇三・〇一五六」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、長門本系統の本文を持つもの。
袋綴。二〇冊。

長門本は、覚一本などの語り本系に分類される諸本がおよそ全一二巻であるのに対して本文が多く、全二〇巻。読み本系に分類される。現存する写本のほとんどが、旧阿弥陀寺（現赤間神宮）所蔵本を祖とすると考えられ（松尾葦江「長門本平家物語伝本に関する基礎的研究」『軍記と語り物』一二号、昭和四八年）、本資料もそのうちの一つである。旧阿弥陀寺（現赤間神宮）所蔵本は、平家一門が滅んだ壇ノ浦に由来することから、長らく古態を留めた原『平家物語』であると考えられており、一度も出版されたことがないにも関わらず、近世期には重要視されて多くの写本が作られた。内閣文庫には現在、五件の長門本系の写本が伝わっている。

本資料はその中でも紅葉山文庫旧蔵のもの。斐楮混ぜ漉き料紙を用いた袋綴の写本で、筆跡から見るに少なくとも四〜五人が分担して書写したものと推察される。毎半葉九行、字高二四・五糎の体裁や料紙は全冊共通している点から見て、取り合わせ本とは考えにくい。

蔵書印は各冊一丁目「秘閣図書之章」のみ。

【書誌】

外題・「長府平家物語 一（〜二十）」左肩無地料紙題簽（二〇・五糎×三・二糎）に墨書

内題・「平家物語」

表紙・紺色表紙（二九・〇糎×二〇・〇糎）

料紙・斐楮混ぜ漉き

行数・毎半葉九行

字面高さ・二四・五糎

匡郭・なし

墨付丁数・①七三丁、②一〇三丁、③七〇丁、④五六丁、⑤七五丁、⑥五三丁、⑦八一丁、⑧六四丁、⑨四九丁、⑩一〇六丁、⑪五三丁、⑫一〇七丁、⑬五七丁、⑭一〇〇丁、⑮八六丁、⑯一一〇丁、⑰八九丁、⑱一〇三丁、⑲八九丁、⑳一〇三丁、㉑六六丁、㉒五二丁

印記・「秘閣図書之章」

【写年・書写者】

本資料に奥書はなく、正確な写年・書写者については不明。前述の通り、複数の筆写者による。

第六冊目の末尾に「此下本書に見えず」とあり、元の本にすでに欠落があったことを示している。

【三八】平家物語 享保年間写か 二〇冊

旧蔵者不明 「請求番号二〇三・〇一五七」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、長門本系統の本文を持つもの。袋綴。二〇冊。古典資料研究会『平家物語 長門本』（芸林舎、昭和五〇年）の底本で、第七巻に「解題」（渥美かをる）が載る。

「解題」によれば本書は前述した旧阿弥陀寺本からの直接転写本で、焼損した箇所に関してもその特徴を受け継いで書写されている。なお本書に見られる朱書の傍書については、別本との校合の形跡である。

外題については、①⑧⑳の三冊は左肩に打付書で「平家物語 一（八・二十）」とあるが、それ以外は「平家物かたり」「平家ものかたり」など用字が様々である。

表紙には「左院蔵書」「史官之印」「内史文庫」の印が見られ、これは各冊冒頭に同じ印が見られる。「史官之印」「内史文庫」の印は、太政官時代に行政官・議政官に置かれた史官のうち、さらに内史で用いられていたもので明治時代初期のみ見られるものである。「左院蔵書」も明治八年まで設置されていた左院で用いられていたものである。なお本書の場合、本文一丁目にもこれと同じ印記があり、さらに「太政官記録印」の印も捺されている。太政官よりも以前の旧蔵者の印と思しきものは、「■氏文庫」（長方陽刻朱印、三・〇糶×二・二糶）だが、■の部分には墨塗りで消印されてしまっていて判別ができない。また各冊の本文末尾には、三・五糶×一・三糶の長方形の切り抜きがある。おそらく本来はここに旧蔵者の印があったものと想像される。いずれにせよ太政官より以前の所蔵は不明である。

【書誌】

外題・①⑧⑳「平家物語 一（八・二一）」②③④⑤⑥⑦⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮

⑯⑰⑱「平家ものかたり 二（三〇七・九〇一九）」

内題・「平家物語」

表紙・香色布目型押表紙（二六・〇糶×一九・〇糶）

料紙・楮紙

行数・每半葉八行

字面高さ・二二・五糶

匡郭・なし

墨付丁数・①一三〇丁、②二二〇丁、③七九丁、④七〇丁、⑤八二丁、

⑥五八丁、⑦一〇三丁、⑧七七丁、⑨五五丁、⑩一〇三丁、⑪六四丁、⑫

一〇四丁、⑬七二丁、⑭一〇七丁、⑮九一丁、⑯一三三丁、⑰一〇二丁、

⑱一一三丁、⑲七三丁、⑳五二丁

印記・「左院蔵書」「太政官記録印」「日本政府図書」「史官之印」「内史文

庫」「■氏文庫」（三・〇糶×二・二糶、長方陽刻朱印）

【写年・書写者】

本資料の識語は⑳五二才以下を通りある。

「平家物語一部二十冊所在長門／国下関阿弥陀寺也世謂長門本又赤間本／享保之頃故長州刺史可寛得／讚岐守大江匡広所持之正本／而命筆工等写之令為家蔵／者也／為後証記之干皆寛保壬／戌晩夏念二／源台近」

「故長州刺史可寛」は長門守金森可寛のこと。「讚岐守大江匡広」は長府藩主毛利匡広、「源台近」は可寛の子の金森台近のことと推測されている。この奥書によれば、享保年間に故金森可寛が、毛利匡広所蔵の正本（旧阿弥陀寺本か）を借り受けて、筆耕に命じて書写させたということになる。

この識語はのち寛保二年に金森台近が記したもの。詳しくは古典資料研究会『平家物語 長門本』「解題」（芸林舎、昭和五〇年）を参照されたい。

【三九】平家物語 明和六年写か 二一冊

那須資明旧蔵 「請求番号二〇三・〇一五四」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、長門本系統の本文を持つもの。

袋綴。本文のほか目録一冊を付すので、二一冊。

第一冊目の外題は左肩に打付書で「長門本平家物語 目録」とある。まず序文を載せ、その後に総目録を載せる。目録の欠けている巻一の場合には「平家発端大概記平家之序文なり」、巻六・九・十一・十三は「目録無之」と記している。第一冊目の裏見返（一七才）のノドに「明和六年己丑二月三日」と、目録と同筆の墨書がある。

第二冊目の末尾（一一二ウ）には傍書と同筆で「以読耕斎蔵本一校了」

とあり、第三冊目の末尾（九一才）にも同様の筆跡で「一校了」とある。第四冊目末尾（九一ウ）には「天保■年四月廿日以読耕齋本一校了」と朱書があるが、■部分が綴目に当たり判読が難しい。古典資料研究会『平家物語 長門本』「解題」（渥美かをる、芸林舎、一九七五年）では「天明■年」と推測しているが、これは誤りで、元号は「天保」が正しい。おそらく「天保六年」あるいは「天保九年」である。

各冊冒頭に「神祇官文庫印」「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」「日本政府図書」「内一二五九九号」の捺印があり、教部省に所蔵されていたことがわかる。また第二冊目・第三冊目には布銭形の朱色陽刻印「石原文庫」の捺印がある。これは幕臣の那須資明（宝永六年に家督を継ぐ、徳川家治に仕える）の蔵書印である。

第一四冊目に一四・六糶×八・五糶の付箋が挟まれているが、本来あるべき丁から剥がれたものと思われる。『源平盛衰記』との校合について記されたもの。第一七冊目にも二一・二糶×六・五糶の朱書付箋が挟まれている、こちらには「水戸御本」との校合について記されている。第二一冊目には一九・八糶×三・八糶の朱書付箋が挟まれており、ここには『東鑑』『吉記』の記載がある。

第一冊目・第二冊目の表紙は水損が著しく、外題が一部欠けている。

【書誌】

外題・「長門本平家物語 目録（一一）〜（二十）」

内題・「平家物語」

表紙・縹色布目型押表紙（二六・五糶×一八・五糶）

料紙・楮紙

行数・每半葉八行

字面高さ・二二・五糶

匡郭・なし

墨付丁数・①一七丁、②一三二丁、③一三二丁、④九一丁、⑤七〇丁、⑥七六丁、⑦五八丁、⑧九四丁、⑨八二丁、⑩六一丁、⑪二一八丁、⑫六八丁、⑬一二六丁、⑭八一丁、⑮一一七丁、⑯一〇七丁、⑰一四九丁、⑱一二八丁、⑲一三八丁、⑳八五丁、㉑六七丁

印記・各冊一才「神祇官文庫印」「宣教使」「教部省文庫印」「図書局文庫」「日本政府図書」「内一二五九九号」②③一才「石原文庫」（布銭形朱色陽刻印）

【写年・書写者】

前述した通り、第一冊目の裏見返（一七才）のノドに目録と同じ筆跡で「明和六年己丑二月三日」とあり、明和六年の写であることが推定されるが、筆跡から見て本資料は複数人で書写しており、すべてが明和六年に写し終えたかどうかは判断が難しい。

第二一冊目末尾（六七ウ）には、傍書と同じ筆跡の朱書で次の通りある。

「平家物語巻第二十惣終／右朱及墨傍註者狩野晴川法印蔵本読耕齋印アル／本ヲ以テ校合ス本書ハ長門国阿弥陀寺蔵本之写■■■■／■■■■ヨリ借得謄写畢」

これによれば、校合は狩野晴川法印蔵書を元に行われたということになる。狩野晴川法印とは、木挽町狩野派の狩野養信のこと。天保四年に法印となっている点から見て、この朱書は天保四年以降のものであると推定される。

なお■の部分は塗りつぶされて消されているが、「毛利甲斐守元義」とあることがろうじて判別できる。これは府中藩主毛利元義のことで、天明五年に生まれ、天保一四年に没した。明和六年の年記が正しいとすると、毛利元義の生きた年代と大きく離れてしまうので、この部分は意図的に消

されたのだろう。

【四〇】平家物語 写年不明 二〇冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇三・〇一六〇」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、長門本系統の本文を持つもの。
袋綴。二〇冊。

横刷毛目表紙の左肩に「平家物語 一(〜二十)」と墨書で打付書がある。

本文は每半葉九行、各冊冒頭に目録を出しているが、第一三冊目・第一四冊目・第一五冊目だけ每半葉一〇行で、目録が二段に分けて書かれるなど、体裁が大きく異なる。また筆跡も異なっている。

各冊冒頭に「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「太政官文庫」印あり。

ほかに蔵書印等は見受けられず、内務省以前の旧蔵者は不明。

【書誌】

外題・「平家物語 一(〜二十)」

内題・「平家物語」

表紙・砥粉色地横刷毛目表紙(二六・三糎×一八・八糎)

料紙・楮紙

行数・①〜⑫、⑯〜⑳每半葉九行、⑬〜⑮每半葉一〇行

字面高さ・二三・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①二一〇丁、②九二丁、③七九丁、④六五丁、⑤六六丁、⑥

五三丁、⑦八四丁、⑧六七丁、⑨九〇丁、⑩四二丁、⑪八九丁、⑫五一丁、

⑬八五丁、⑭七五丁、⑮一〇二丁、⑯九七丁、⑰一〇九丁、⑱七一丁、⑲

五〇丁

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「太政官文庫」

【写年・書写者】

本資料には奥書がないため、はっきりとした写年・書写者は不明。異なる筆跡が見られることから、少なくとも二人以上の手による書写である。

【四一】平家物語 天保年間か 二〇冊

元老院旧蔵 「請求番号二〇三・〇一五八」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、長門本系統の本文を持つもの。
袋綴。二〇冊。

縹色表紙の左肩に雲母引料紙の題簽で外題がある。但し、第二冊目は題簽が脱落しており左肩に打付書きされている。第七冊目は題簽欠。第一冊目・第一九冊目は別の無地の題簽になっている。

第一冊目見返しに巻一の目録を示した附箋あり。本文とは別筆。また第二冊目の一丁目には横長(一四・〇糎×四六・〇糎)の付箋が三つ折りで貼付されている。また第一冊目にも同様の付箋(一三・八糎×二二・〇糎)あり。それぞれ校合と目録が墨書されている。

墨書されている本文のほか、朱で校合がなされている。

印記は各冊冒頭に「元老院図書記」「太政官文庫」とあり、本書が元老院旧蔵であることがわかる。

【書誌】

外題・①「平家物語 第一」左肩雲母引料紙題簽(一六・〇糎×二・二

糎)に墨書、②「平家物語第二」左肩打付墨書、③〜⑥「平家物語 第三

(第六)「左肩雲母引料紙題簽(一六・〇糎×二・二糎)に墨書、⑦題簽欠、⑧⑩「平家物語 第八(第拾)」左肩雲母引料紙題簽(一六・三糎×三・三糎)に墨書、⑪「平家物語 卷十一」左肩無地料紙題簽(一八・五糎×三・三糎)、⑫⑬「平家物語 第拾式(第拾八)」左肩雲母引料紙題簽(一六・一糎×三・三糎)に墨書、⑭「平家物語 卷十四」左肩無地料紙題簽(一五・三糎×三・三糎)、⑮「平家物語 第拾」左肩雲母引料紙題簽(一六・〇糎×二・二糎)に墨書

内題・「平家物語」

表紙・縹色表紙(二七・〇糎×一九・五糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉七行

字面高さ・二〇・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①一二二丁、②七四丁、③七九丁、④七四丁、⑤八三丁、⑥六一丁、⑦七六丁、⑧六〇丁、⑨四四丁、⑩八三丁、⑪四六丁、⑫八〇丁、⑬七三丁、⑭五三丁、⑮一九九丁、⑯八九九丁(二五丁目後補、高さ二五・三糎)、⑰一〇九丁、⑱八二丁、⑲八五丁、⑳五七丁

印記・「元老院図書記」「太政官文庫」

【写年・書写者】

本資料には数冊おきに奥書がある。それぞれ以下の通りである。

①一二二ウ「天保四癸巳年四月初五日畢 弥生五日より初候(花押)」(朱書)

⑤八三ウ「天保四癸巳文月初五日校合畢 利長(花押)」(朱書)

⑧六〇ウ「あめやすきこゝのつものうるう卯月の永の日に／文のおよんかきりうつつ 源利長(花押)」(墨書)

⑳五七オ「甲年重陰廿日校合畢 らくた(花押)」(朱書)

㉑五七ウ「天保八丁酉年文月廿四日 遠山氏楽土翁行年八十六歳終／此世から国の八隅に響く名は死出の旅路の／道に迷はし／かく申送候此物語 巻く供養のため読手向／奉り候／楽陀」

この奥書を見る限り、天保四年から八年にかけて、校合が加えられたことがわかる。また第八冊目の奥書からすると、本文の書写も同時期と推察できる。特に注目すべきは第二〇冊目の奥書で、ここにある「遠山氏楽土翁」とは、長崎奉行を務めた遠山景晋(一七五二〜一八三七)のことである。楽土と号し、天保八年七月二二日に八六歳(官年)で没した。「楽陀」は彼の号をもじったもの(「駱駝」「落墮」とかかるか)であり、奥書にある「源利長」の号で、景晋と近い人物だったことが想像される。

【四二】平家物語 写年不明 一二冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特一〇一・〇〇〇七」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、一般的には「城方本」(「国民文庫本」と称されるものである。袋綴。一二冊。

山田孝雄の『平家物語考』(明治四四年)に「慶長書写城方本」と項目を立てているのが本資料に当たりますが、奥書がないため慶長年間の書写であるかどうかははっきりしない。表紙に朱で「来歴史本」と書かれた付箋が貼付されており、『重訂御書籍来歴史』に「古写本ニシテ城方流ノ句読アリ」として挙げられているのが本資料と推察される。これについて『平家物語考』は「句読は朱点を加ふ。即ち来歴史にいへる城方流の句読とはこれなるべし」と述べ、彰考館所蔵の八坂本と比較している。近年の研究におい

ては八坂本系二類本に分類される。(山下宏明編『平家物語八坂系諸本の総合的研究』平成七年度科学研究費補助金〔総合研究A〕研究成果報告書、平成八年)

外題は左肩に金茶色の題簽で「平家物語 卷第一(二十止)」と墨書してあるが、第一冊目に限り、題簽の右上に「城方」と墨書されている。本資料はこれによって「城方本」と称される。外題の文字とは別筆。

各冊第一丁目に「秘閣図書之章」印あり。ほか「日本政府図書」の印が捺されるが、これは冊次によって場所が異なっている。

全冊とも地に水損あり。

【書誌】

外題・「平家物語 卷第一(二十止)」左肩金茶色料紙題簽(一八・三糎×三・三糎)に墨書

内題・「平家物語」

表紙・浅葱色地卍字繫艶出表紙(二六・七糎×一九・八糎)

料紙・楮紙

行数・每半葉八行

字面高さ・二二・二糎

匡郭・なし

墨付丁数・①九三丁、②九一丁、③一三四丁、④九二丁、⑤七六丁、⑥六三丁、⑦八三丁、⑧六七丁、⑨一一八丁、⑩八一丁、⑪九二丁、⑫一〇七丁

印記・「秘閣図書之章」「日本政府図書」

【写年・書写者】

本資料に奥書はない。『重訂御書籍来歴志』は「古写本ニシテ城方流ノ句読アリ」とする。『改訂内閣文庫国書分類目録』は「慶長書写城方本」「来

歴志著録本」「慶長」写」とする。

【四三】平家物語 写年不明 一三冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇二二・〇〇〇一」

本資料は軍記物語『平家物語』の写本で、一般的に「秘閣粘葉本」と称されるものである。綴葉装。一三冊。

山田孝雄『平家物語考』(明治四四年)に「秘閣粘葉本」と名付けられて紹介されたことから以降この名で呼ばれているが、実際には粘葉装ではなく綴葉装である。そのため、遊紙が多い。

地厚の斐紙に、金泥・銀泥で霞や秋草の下絵が描かれている。ほぼ全ての丁の図柄が異なっており(主に秋草・観世水・切箔・松・波・千鳥等)贅のこらされた美品である。見返しも絹張りで、金泥で霞や秋草文様が施されている。二二・五糎×一八・二糎の正方形に近い形で、全ての丁が色紙のように装飾され、每半葉八行の大きな文字で本文が書写されている。表紙も金茶色地に縹色の山路文を織ったもので、中央の題簽も金茶色の料紙に金泥で櫻花菱が下絵として描かれている。

装飾方法については狩野派の関連がうかがえる。

本資料は紅葉山文庫の旧蔵であることは「秘閣図書之章」印からわかるものの、正確な来歴ははっきりしない。但し嫁入り本などの奥道具ないし工芸品として製作されたものであることが想像される。

観音開きの扉を持つ箱(二七・五糎×二三・〇糎×四三・五糎)に収納されており、扉には金泥で「平家物語／拾式卷」とある。扉には金具が二つ付いているが、おそらく元の鍵が破損したため、あとから留め具として

金具がもう一つ付けられたのだろう。箱の天にも持ち手が付けられている。内部は四段に仕切られており、それぞれが引き出しになっており、上から四冊・三冊・三冊・三冊と収納されている。引き出しの高さはそれぞれ、一二・〇糎、八・〇糎、九・二糎、九・二糎である。

本資料は灌頂巻を持たず、いわゆる断絶平家型の本文を持つ。分類としては八坂系二類本に当たり、京都府立総合資料館本と近い。但し、加筆・誤脱も多く、豪華本として製作されたため本文の正確性には乏しい。最初に総目録を一冊置くため、一二巻一三冊。

【書誌】

外題・「平家物語目録（二）十二」中央金茶色金泥襷花菱文様料紙題簽（一三・〇糎×三・二糎）

内題・「平家物語」

表紙・金茶色地縹色山路文様（織）表紙（二二・五糎×一八・二糎）

見返し・金泥霞秋草文様（織）

遊紙・①本文前一丁・本文後八丁、②前一丁・後三丁、③前一丁・後五丁、④前一丁・後二丁、⑤前一丁・後二丁、⑥前一丁・後二丁、⑦前一丁・後一丁、⑧前一丁・後三丁、⑨前一丁・後四丁、⑩前一丁・後四丁、⑪前一丁・後五丁、⑫前一丁・後三丁

料紙・斐紙

行数・每半葉八行

字面高さ・一七・〇糎

匡郭・なし

墨付丁数・①一五丁、②二二九丁、③一三七丁、④一九五丁、⑤一四三丁、⑥二二二丁、⑦二二七丁、⑧二二七丁、⑨九八丁、⑩一五八丁、⑪一四〇丁、⑫一四四丁、⑬一六五丁

印記・①「秘閣図書之章」、①見返し「日本政府図書」（票）

【写年・書写者】

本資料に奥書はない。豪華本の体裁から想定するに江戸時代前期か。

（調査員）